名古屋芸術大学研究紀要第 33 巻　167 ～ 177 頁（2012）

日英語における場所句構文の情報構造 *

Information Structure of Locative Construction in Japanese and English

谷川　晋一　*Shin-ichi Tanigawa*
（デザイン学部教養部会）

1．はじめに

本稿は、生成文法の基本的な枠組みに則しながら、日英語における場所句構文の情報構造を論じるものである。本稿が取り扱う場所句構文とは、前置詞句／後置詞句で表わされる場所句、名詞句、動詞の三要素で構成され、名詞句指示対象の位置・存在する場所を表わす文で、かつ、(1) と (2) に示すように、二つの語順形式で交替可能な文である。

(1)　a.　ジョンの弟が公園にいた。
　　b.　公園にジョンの弟がいた。
(2)　a.　John's brother was in the park.
　　b.　In the park was John's brother.

日英語の場所句構文は、上記のように、場所句が名詞句に後続する語順と先行する語順の二つの形式をとるという点で、表層上、対応関係を持つように見える。本稿では、a の語順形式を名詞句・場所句語順、b の語順形式を場所句・名詞句語順と呼ぶ。

本稿は、上記二つの語順のうち、場所句・名詞句語順に焦点を当てる。主たる議論の構成は、以下の通りである。2 節では、場所句・名詞語順文に関する研究の背景と問題の所在を明らかにする。具体的には、場所句・名詞語順文を日英語で平行的に派生させるという見解がある一方で、この見解には、疑問の余地が残ることを指摘する。3 節では、場所句・名詞語順文の情報構造が日英語間で異なるという事実を明らかにした上で、この違いが日英語の当該語順文を平行的に派生させるという分析にとって大きな問題になると論じる。4 節では、場所句の最終的な位置が日英語間で異なるという統語論に関する簡潔な議論を提示した上で、この場所句の違いが 3 節で示す情報構造の違いに関連している可能性について言及する。最後に、5 節では、全体のまとめを行った上で今後の研究の課題について述べる。

2 節以降の主たる議論に移る前に、当該構文で用いられる動詞と名詞に関して言及をしておくことにする。まず、動詞に関しては、日本語の場合、Kuno（1973）以来、存在動詞「いる／ある」が典型的に用いられる一方で、英語の場合、「いる／ある」に対応する

と考えられる *be* 動詞に加え、“lie” や “hang” 等の存在を表わす非対格本動詞も使用可能であると言われている。本稿も、それに沿った形で、日本語の場合には、「いる／ある」を、英語の場合には、*be* 動詞と非対格本動詞の両方を含む例を用いることとする。

次に、名詞句に関して言及をしておく。一般に、日本語の主語名詞句は、主格の格助詞「が」で標示するが、それを、話題を表わす助詞「は」で置き換えることが可能である。ただし、この助詞の違いは、構造的位置の違いに反映される可能性があり、本稿の議論に多大な影響を与えるものである。場所句構文の名詞句としては、上記例文に挙げる定名詞句に加え、不定名詞句も使えるが、日本語の場合、定性に関わらず、「が」もしくは「は」を使用可能である。文脈等の特別な指定がない限り、必ずその一方を用いなければならないという特別な制約はない。よって、本稿では、生成文法に基づく先行研究に従って、日本語の主語名詞句や場所句構文の名詞句については、規範格である主格「が」で標示されたものを一律に用いて議論を進めていく。

２．研究の背景と問題の所在 : 場所句・名詞句語順文の統語派生・構造

日英語の場所句構文は、一般に、名詞句と場所句の両方が動詞句（VP）内に生成される（3）のような基底構造を持つと分析されている。

（3） a. [$_{VP}$ ジョンの弟が　公園に　いた]
　　 b. [$_{VP}$ was　John's brother　in the park]

ここでの場所句は、文を意味的に成立させる上での必須要素、すなわち、項であると考えられるため、VP 内に生成されている。この分析の妥当性は、英語では付加詞の前置詞句を用いて（2b）の語順形式を作ることができない、日本語では「に」で標示される後置詞句が「で」で標示される付加詞の後置詞句とは異なる振る舞いを示す、といった統語的観点からも支持される（日本語については、Takezawa（1993）や中右（1998）等を参照）。

1 節の（1）と（2）に例示した二つの語順のうち、名詞句・場所句語順文の統語派生については、日英語両方で何ら問題がないと言える。（4）のように、名詞句が一般に主語位置とみなされる TP 指定部に移動することで当該語順が得られることに異論はないだろう。

（4） a. [$_{TP}$ ジョンの弟が　[$_{VP}$ t_{NP} 公園に　いた]]
　　 b. [$_{TP}$ John's brother　[$_{VP}$ was　t_{NP} in the park]]

統語派生に関して議論の余地があると考えられるのは、もう一つの場所句・名詞句語順文である。英語の場所句・名詞句語順文は、よく知られているように場所句倒置構文と呼ばれ、その統語派生については、Bresnan（1994）や Collins（1997）等の多くの先行研究

において議論されている。これらの先行研究では、(5) に示すように、場所句が TP 指定部に移動し、名詞句が VP 内に残留する分析が提示されている。

(5) [$_{TP}$ in the park [$_{VP}$ was John's brother t_{PP}]]

一般に主語位置とみなされる TP 指定部に名詞句ではなく場所句が移動するという考え方は有標的であるが、この分析を支持する事実として、(6) に示すような繰り上げ等において、場所句と主語名詞句の間に平行性が存在することを示す事実等が多々存在する。

(6) a. In the park seems to have been John's brother.
b. John's brother seems to have been in the park.

日本語の場所句・名詞句語順文に対しても、英語の場合と同様に、場所句が TP 指定部に移動し、名詞句が VP 内に残留することにより当該語順が得られるという (7) のような分析が Ura (1996, 2000) や竹沢 (2000) 等により提示、採用されている。

(7) [$_{TP}$ 公園に [$_{VP}$ ジョンの弟が t_{PP} いた]]

この派生方法は、(3a) の基底構造から場所句・名詞句語順を導く上で、十分に利用可能なものである。これに従うと、日英語の当該語順形式は平行的な方法で得られることになり、表層的な語順の配列だけでなく、要素の移動という点においても、日英語の当該語順形式は対応関係を持つことになる。

確かに、この派生方法に基づくと、「場所句の TP 指定部への移動」というシンプルで統一的な形で、日英語の当該語順文を導くことが可能になるものの、筆者としては、日英語の当該語順文が同じ派生と構造を持つという見解について、懐疑的である。その根拠としては、複数の統語的事実を挙げることができるが、その議論には、統語論に関する複雑な枠組みの提示と大幅な紙面を要するために他の機会に譲ることにする。[1] 本稿では、少々視点を変えて、先行研究ではあまり取り立てて議論されていない情報構造の側面から議論を行うことにする。

情報構造に関する議論では、文の中でどの要素が新情報・旧情報を担うか、焦点、前提、話題として機能するか、といった点が重要となる。もし (7) のように日本語の場所句・名詞句語順文が英語の場合と同じ派生と構造を持つとすれば、情報構造上の意味においても日英語の当該語順文は、同じ特性を示すと予測される。しかしながら、次の 3 節で詳しく示すように、この予測に反して、日英語の当該語順文は、情報構造において顕著な違いを見せる。よって、情報構造の観点から見ると、日英語の当該語順文が同じ派生と構造を

持つとは考えにくいという事実が浮き彫りとなり、上記のように平行的な分析を日英語の両方に採用する分析にとって大きな問題となる。

以下、3 節では、二つのテストを用いて、場所句・名詞句語順文が日英語間で異なる情報構造を持つことを明らかにする。

３．場所句・名詞句語順文の情報構造

3 節では、場所句・名詞語順文の情報構造が日英語間で異なることを明確化する。具体的には、日本語の場合、焦点になるのは、場所句と名詞句のどちらであってもよい一方で、英語の場合、名詞句が必ず焦点になることを示す。

先行研究において、英語の場所句・名詞語順文では、名詞句がその文の焦点になると指摘されてきた。例えば、Rochemont（1978:30）は、(8a）を分裂文でパラフレーズした場合、適切になるのは、名詞句を焦点化した（8b）であり、場所句を焦点化した（8c）は適切なパラフレーズにならないと述べている。

(8) a. At the foot of the stairs was his mother.
b. It was his mother that was at the foot of the stairs.
c. It was at the foot of the stairs that his mother was.

一方、同じ分裂文という観点から、日本語の当該語順文を見ると、直観的に、(9a）は（9b）の形でも（9c）の形でもパラフレーズができると考えられる。

(9) a. 階段の下にジョンの母親がいた。
b. 階段の下にいたのは、ジョンの母親だ。
c. ジョンの母親がいたのは、階段の下だ。

(9a）をどちらでパラフレーズするかについては文脈等によって大きく左右されると思われるが、音韻上のストレスを（9a）の名詞句に置けば（9b）の形で、場所句に置けば（9c）の形でパラフレーズされるはずである。

場所句・名詞語順文の情報構造については、英語の場合、Rochemont（1978）を初めとする先行研究において、一定の議論がされている一方で、日本語の場合は、管見の限り、情報構造の観点からあまり表立った指摘はされていない。よって、以下では、場所句・名詞語順文の情報構造を、日英語で平行的に比較考察してみることにする。

ここでは二つのテストを用いるが、一つ目のテストは、Rochemont and Culicover（1990）等で用いられている疑問応答テストである。一般に、*Wh* 疑問文の *wh* 要素に対応する答えは応答文の焦点になる。例えば、（10）と（11）の場合、応答文 A の焦点は、下線で示

すように、疑問文Qの「何」と“what”に対応した「時計」と“a watch”であることがこのテストで確認できる。

（10）Q.　ジョンが何を買ったの？
　　A.　ジョンが時計を買ったんです。[2]
（11）Q.　What did John buy?
　　A.　John bought a watch.

このテストを場所句・名詞語順文に適用してみる。まず、日本語の場合、（12）と（13）のように、場所句・名詞語順文は、「何」を用いた疑問文と「どこ」を用いた疑問文への適切な応答になる。

（12）Q.　暖炉の横に何があったの？
　　A.　暖炉の横に古いソファがあったんです。
（13）Q.　どこに古いソファがあったの？
　　A.　暖炉の横に古いソファがあったんです。

一方で、英語の場合、（14）と（15）の差から明らかなように、当該語順文は、“what”を用いた疑問文に対しては適切な応答となるものの、“where”を用いた疑問文に対しては適切な応答とならない。以下の例文は、Rochemont and Culicover（1990:26）からの抜粋で、筆者が焦点に対応する部分に下線等を加筆したものである。

（14）Q.　What was standing next to the fireplace?
　　A.　Next to the fireplace stood that old sofa.
（15）Q.　Where did that old sofa stand?
　　A. #Next to the fireplace stood that old sofa.

このことから、英語の場所句・名詞句語順文では、名詞句が必ず焦点になる一方で、日本語の場合、場所句と名詞句のどちらが焦点になってもよいと言える。

二つ目のテストは、Bresnan（1994）等で用いられている否定対比テストである。文末に「～ではなくて」や“but not ～”等の否定表現を置いた場合、それと対比される要素が文の焦点になる。例えば、（16）の場合、「テレビ」と“a TV”と対比される「時計」と“a watch”が文の焦点になっている。

（16）a.　ジョンは時計を買ったんだよ、テレビではなくて。

b.　John bought a watch, but not a TV.

否定対比テストの観点からも、場所句・名詞句語順文の情報構造が日英語で異なることが浮き彫りとなる。まず、日本語の場合、（17）のように、名詞句の対比と場所句の対比の両方が可能である。

（17）a.　書斎に油絵があったんだよ、水彩画ではなくて。
　　b.　書斎に油絵があったんだよ、応接間ではなくて。

一方で、英語の場合、（18a）に示すように、名詞句の対比は可能であるが、（18b）のような場所句の対比はかなり不自然になる。

（18）a.　On the wall hung canvases, but not paintings.
　　b. ??On the wall hung canvases, but not on the easels.　　（Bresnan（1994:86））

このように否定対比テストからも、英語の場合には、名詞句が必ず焦点になる一方で、日本語の場合には、場所句と名詞句のどちらが焦点になってもよいことがうかがえる。

以上のようなテストから、場所句・名詞語順文が担う情報構造上の意味が日英語間で大きく異なることが示された。日英語の場所句・名詞語順文が情報構造において顕著な違いを見せるという本節の結果に基づくと、日英語の当該語順文が平行的な派生と構造を持つという見解は素直には受け入れ難いことが示唆される。

４．統語構造と情報構造の関連性

３節では、日英語の場所句・名詞語順文が平行的な派生と構造を持つという見解に対して、情報構造の観点から批判的な議論を行った。４節では、場所句・名詞語順文で見られる言語間の更なる差異について統語論に少し踏み込んだ議論を行う。具体的には、日英語の当該語順文では、場所句の最終的な位置が異なることについて論じる。そして、この違いが３節で示した情報構造における違いに関連していることを指摘する。

２節で見たように、英語の場所句・名詞句語順文では、場所句が TP 指定部に移動するという分析が多くの先行研究でなされている（（5）参照）。その中には、Nishihara（1999）や Tanigawa（2009）のように、場所句が TP 指定部を経て、さらに TopP（Topic Phrase）等の話題位置にまで移動するとみなす（19b）のような拡張分析も存在する。

（19）a.　In the park was John's brother.
　　b.　$[_{TopP}$ in the park $[_{TP}$ t_{PP}' $[_{VP}$ was John's brother t_{PP}]]]

話題位置である TopP については、その統語的特性及び情報構造上の意味特性が Rizzi（1997）を代表とするいわゆる Cartography 研究で盛んに議論されている。TopP は、(20) に示すよう、典型的には、話題文における話題を表す要素が現れる位置であり、日本語の場合、話題を表す助詞「は」が付随した要素が典型的に現れると考えられている。

（20）a. [$_{TopP}$ あの写真は [$_{TP}$ ジョンがメアリーにあげた]]
b. [$_{TopP}$ That picture [$_{TP}$ John gave to Mary]]

また、TopP の意味特性に目を向けると、この位置に存在する要素が文の話題として機能する一方で、それに後続する文の残余部分がその話題に関するコメントを行うことになる。

先の 3 節では、英語の場所句・名詞句語順文における場所句が焦点として機能しない事実を見た。この点に少し踏み込むと、場所句は、先行文脈に既に現れていたり、先行文脈から想起可能であったりする要素、すなわち定名詞句や代名詞を含むケースが典型的である（Birner（1994）や Biber et al.（1999）等を参照）。これに従うと、場所句は、文の中で、広い意味での話題や背景として機能していると捉えられることができる。したがって、(19) のような統語分析は、場所句の情報構造上の意味にも合致していることになる。

場所句が話題位置にあるという分析は、情報構造の観点のみならず統語的観点からも支持される。その根拠として挙げられるのは、(21) の括弧で示す複合名詞句補文、日本語におけるいわゆる連体修飾節での生起可能性である。

（21）a. [ジョンがメアリーにあの写真をあげた] 理由
b. the reason [why John gave that picture to Mary]

(22) に示すように、日英語の話題文は、この環境に生起できない。これは、複合名詞句補文が話題位置を持たないという性質に起因すると考えられる。

（22）a. * [あの写真は、ジョンがメアリーにあげた] 理由を私は知らなかった。
b. * I didn't know the reason [why that picture, John gave to Mary].

この点を踏まえて、英語の場所句・名詞句語順文に目を向けてみる。名詞句・場所句語順 (23b) とは対照的な (23a) から明らかなように、英語の場所句・名詞句語順文は、複合名詞句補文に生起できない。

（23）a. * I didn't know the reason [why in America are John's parents].
b. I didn't know the reason [why John's parents are in America].

（22a, b）と（23a）の平行性は、英語当該語順文の場所句も話題要素と同様に話題位置に移動しているという分析を支持する論拠の一つと言えよう。

一方、日本語の場所句・名詞句語順文は、この点に関して、英語の場合とは対照的な振る舞いを見せる。（24a）に示すように、日本語の当該語順文は、複合名詞句補文に全く問題なく生起できる。

（24）a.　[アメリカにジョンの両親がいる] 理由を私は知らなかった。
　　b.　[ジョンの両親がアメリカにいる] 理由を私は知らなかった。

したがって、日本語の場所句構文では、語順に関係なく、場所句に話題位置への移動が適用されているとは考えにくい。

以上、4 節をまとめると、場所句・名詞句語順の場合、英語では、場所句が義務的に話題位置にまで移動している一方で、日本語では、場所句が義務的に話題位置に移動する必要性がないと言える。当然、場所句を「公園には」のように話題化することは可能であるが、この話題化は、恣意的なものであって、構文を成立させるために義務的に求められるものではない。

この話題位置への移動に関する違いは、先の 3 節で示した情報構造における違いに密接に関連していると考えられる。まず、英語の場所句・名詞句語順文であるが、この場合、場所句は最終的に話題位置に移動することになり、この移動が一義的な意味解釈の引き金になっていると考えられる。話題位置への移動という統語的特性を情報構造上の意味特性に置き換えるならば、場所句は、この移動により、日本語の「は」が付随した名詞句等のように文の話題を担う要素に義務的に転換されていることになる。よって、当該語順文の場所句は、そもそも焦点要素になる資格を統語論の時点で持っておらず、話題位置の後続部分の中にある要素が焦点としての機能を担うことになる。焦点になりうる候補としては、残る動詞か名詞句のどちらかになるが、Levin and Rappaport Hovav（1995）や Nakajima（1996）でも指摘されているように、当該語順形式での動詞は、本動詞であっても、*be* 動詞と同様に、その意味情報は軽いものでなければならないという一般化が得られている。したがって、動詞も焦点になることはないため、必然的に、残された名詞句が焦点要素の唯一の候補となる。名詞句が焦点になるという一義的な意味が得られるのは、このような理由からであると考えられる。

一方、日本語の場所句・名詞句語順文であるが、英語の場合とは異なり、場所句や名詞句が話題位置のような特殊な解釈に結びつく位置にあるとは考えにくい。また、この構文の規範的動詞である「いる」「ある」のような存在動詞は、強い意味を持ち得ないため、焦点になることはない。よって、焦点になるのは、名詞句と場所句のどちらかということ

になり、どちらが焦点や背景になるかは、統語論以外の部門で文脈や状況等により決まるということになろう。

5．まとめと今後の課題

以上、本稿では、場所句・名詞句語順文が日英語間で著しく異なる情報構造を持つことを考察し、当該語順文の統語派生と構造が日英語で平行的だという見解に対して批判的な検討を行った。加えて、英語の当該語順文においてのみ、場所句が最終的に話題位置に移動するという言語間の際に関する指摘も行った。最後に今後の課題について言及を行って議論を締めくくることにする。

4節の議論に従うと、英語の場所句･名詞句語順文（25a）は、(25b）のような派生を持つ。

（25）a.　In the park was John's brother.

　　b.　$[_{TopP}$　in the park　$[_{TP}$　t_{PP}'　$[_{VP}$　was　John's brother　t_{PP}　$]]]$

その一方、日本語の当該語順文は、少なくとも場所句が話題位置にまで移動しないという点で英語とは異なることになる。この点を考慮すると、日本語の場合には、2節で示し、(26b）に再掲するように、場所句がTP指定部に移動し、それ以上移動しない派生が適用される可能性がある。

（26）a.　公園にジョンの弟がいた。

　　b.　$[_{TP}$　公園に　$[_{VP}$　ジョンの弟が　t_{PP}　いた　$]]$

しかしながら、日本語の場所句・名詞句語順文には、これ以外にももう一つの派生の可能性が残っている。それは、かき混ぜ操作を用いた派生方法である。日本語には、（27b）に示すように目的語名詞句や後置詞句等がかき混ぜ操作により主語上位の文頭に移動したと分析される（27a）のような「かき混ぜ文」が存在する。

（27）a.　机の上にジョンが花束を置いた。

　　b.　$[_{TP}$　机の上に$_i$　$[_{TP}$　ジョンが$_j$　$[_{VP}$　t_j　t_i　花束を　置いた　$]]]$

日本語の場所句・名詞句語順文にも、原理上、かき混ぜ操作を用いた派生方法が適用可能である。すなわち、(28）に示すように、主語がTP指定部に移動し、さらにその上位に場所句が移動する派生方法である。

（28）　　[　公園に　$[_{TP}$　ジョンの弟が　$[_{VP}$　t_{NP}　t_{PP}　いた　$]]]$

日本語の比較的自由な語順は、かき混ぜ操作の広い適用に起因すると言われている。よって、かき混ぜ操作を用いた派生方法が場所句構文にも適用されていると考えることは不自然ではない。

まとめると、日本語の場所句・名詞句語順文には、英語とは異なる派生方法の可能性が 2 つ存在することになる。このどちらが派生方法としてより適切であるか、もしくは両方が適用されうるのかについては本稿では触れていない統語論における観点から詳細な議論を行う必要がある。今後は、この点についても深く考察することで、日英語間に存在する相違点の全体像を明らかにしていきたい。

注

＊ 本稿は、2009 年に筑波大学に提出した博士論文 *A Minimalist Analysis of A′-Constructions in English and Related Constructions in Japanese* の第 4 章の一部及び日本エドワード・サピア協会第 25 回研究発表会（2010 年、於専修大学）における口頭発表「日英語における場所句構文の比較考察」の一部を基にしたものである。まず、今回扱ったテーマに着手するにあたり最初に貴重な意見を下さった筑波大学の小野塚裕視先生に感謝したい。加えて、本稿を執筆する機会を与えてくださった早川知江先生をはじめとする名古屋芸術大学の関係の先生方にも感謝したい。

1 例えば、Ura（1996, 2000）は、自身の（7）のような分析を支持する根拠として、「ながら」節との共起や再帰代名詞「自分」に関するデータをしている。しかし、それらのデータは、多少修正を加えることで Ura が提示するものとは逆の文法性になる等の傾向が見られるため、適切な例や根拠であるとは言い難い。

2 ここでは、主語名詞句及び場所句構文の名詞句を、「は」ではなく、「が」で標示しやすいように、「のだ文」を口語化した「んです」を応答文で使用している。4 節の（20a）で示したように、「は」と「が」では、標示される要素の構造的位置が異なる可能性がある。当該名詞句の規範格が「が」であるにも関わらず、それらを、構造的違いを生じさせる恐れのある「は」で標示することは、特に本稿のように、構造の厳密な違いを重視する議論にとっては避けるべきである。ここでも、同様の理由から、当該名詞句を「が」で標示することに努めており、「が」で標示しやすい「んです」を意図的に応答文で用いている。

参考文献

Biber et al.（1999）*Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman, London.

Betty J. Birner（1994）“Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion,” *Language* 70, 233-259.

Joan Bresnan（1994）“Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar,” *Language* 70, 78-96.

Chris Collins（1997）*Local Economy*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Kuno, Susumu（1973）*The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

Beth Levin and Malka Rappaport Hovav（1995）*Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Interface*, MIT

Press, Cambridge, Massachusetts.

Nishihara, Toshiaki (1999) "On Locative Inversion and *There*-construction," *English Linguistics* 16, 381-404.

Michael S. Rochemont (1978) *The Theory of Stylistic Rules in English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst. [Published by Garland, New York, 1985.]

Michael S. Rochemont and Peter W. Culicover (1990) *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.

Takezawa, Koichi (1993) "Secondary Predication and Locative/Goal Phrases," *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 45-77, Kurosio, Tokyo.

Tanigawa, Shin-ichi (2009) "A Split Feature Analysis of Topicalization and Locative Inversion," *JELS* 26, 299-308.

Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.

Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford University Press, New York.

中右実 (1998)「空間と存在の構図」中右実・西村義樹著『構文と事象構造』1-106 研究社出版 .

中島平三 (1996)「多重主語構文としての場所句倒置」『英語青年』142:1, 18–22.

竹沢幸一 (2000)「アルの統語的二面性―be/have との比較に基づく日本語のいくつかの統語的解体の試み―」『「東アジア言語文化の総合的研究」筑波大学学内プロジェクト (A) 研究報告書』76-100 筑波大学文芸・言語学系.

Resume

This paper investigates locative construction in Japanese and English from perspectives of information structure and generative syntax. Locative construction this paper discusses is one in which LP (locative phrase) either precedes or follows NP (noun phrase), which gives rise to two word order patterns. This paper puts special focus on the order pattern in which LP precedes NP, i.e. the LP-NP order pattern.

The primary aim of this paper is to demonstrate that the information structure of the LP-NP order pattern is significantly different between Japanese and English. Arguments are provided where the focus element is ambiguous between LP and NP in the Japanese case, while it is unambiguously NP in the English case. It is pointed out that this difference in information structure is by and large related to the syntactic position of LP.